

## 中国語初級学習における問題点 Notes on the Teaching of Elementary Chinese

永 倉 百合子  
NAGAKURA, Yuriko

I started teaching Chinese at Jissen Women's University nearly twenty years ago. During this time the study environment and the instruction of foreign languages have changed greatly. These changes are even more remarkable in the area of Chinese studies. Nowadays there are a great number of Chinese textbooks, edited readers and other teaching materials such as educational videos and DVDs to choose from. Students have changed from the students of twenty years ago, too. In spite of these changes, I recognize the same difficulties in these new students and their studies that I encountered twenty years before. These difficulties are characteristic to the study of Chinese. In order to improve the teaching of Chinese it is necessary to make an inquiry into these difficulties. In Chinese there is a word called "jiaoxue" which the dictionary defines as, "the work which teachers teach and from which they initiate knowledge and skill with the cooperation of students." Concretely speaking, "jiaoxue" is not a one-way process, but a mutual pedagogical endeavor involving both teachers and students. It is my belief that studying foreign languages embodies the meaning of "jiaoxue." In this paper, I describe the problems I have encountered in teaching Chinese in the past and up to the present and identify the clues that lead to the inherent problems associated with studying Chinese. I also look at the results obtained from questionnaires administered to students of Chinese, and questions posed by the students themselves.

実践女子大学で中国語を教える機会を与えていただき、以来二十年近い月日が経過した。この間にも語学学習をめぐる環境は大きく変わり、テキスト一つとっても、数限りなく出版されるものの中からどれを選んで使うか、途方に暮れてしまうほどである。学校で学ぶ外国語としては、英語や他の諸言語に比べかなり立ち後れていた中国語の学習環境はその変化が特に著しく、現在の多量な教科書、副読本、音声教材、学

習用ビデオ、DVDなどを目の当りにすると、十年前、二十年前と比べ隔世の感がある。また、学生の質、学習の場の雰囲気も大きく様変わりした。しかし毎年新入生を迎え、入門から初級、そして中級にかかる、いわゆる「基礎中国語」の課程を教えてみると、教師として直面する問題は、基本的には十年前、二十年前と比べてあまり変わっていない事に気づく。その当時に教える側、教わる側が困難と感じていた点は今も依然としてなかなか解決出来ずに存在している。おそらくはこの辺りにこそ、中国語学習、そして中国語の難しさがあるのであろう。それゆえ、そこに注目して考えて行くことは、今後の教授法、学習法の改良になんらかの役に立つのではないだろうか。

中国語に“教学 jiàoxué” (jiàoxuéは現在中国で用いられている「ピンイン」と呼ばれる発音表記法で、あえて日本語の片仮名表記にするならば「チャオシュエ」となる) という言葉がある。中国語の辞書には「教師が知識、技能を学生に伝え授ける仕事。それは教師が教え、学生がそれを学ぶという共同作業である」と説明されている。具体的にいえば、教師にとっては「何をどのように教えていくか」ということであり、学生にとっては「教えられたことをどのようにして自分のものにしていくか」ということで、その統一が“教学”であり、それは繰り返し繰り返し行われ、また決して一方通行ではなく相互に影響を及ぼし合っていくものなのである。こう考えると、語学学習はまさに“教学”という行為に他ならない。

本文は実践女子大学という“教学”の場において、学生に行ったアンケート、日頃学生から提起される問題、自分自身が痛感している問題のメモである。その中から、基礎中国語学習における問題を見つけ、その解決法を模索していきたい。

## 学習者について

現在担当しているのは全学部共通科目としての中国語と、英文学科の必修選択科目としての中国語で、いずれも九十分授業を週二回のペースで行っている。以前、週一回の通年科目として一年目に中国語A、二年目にその応用としての中国語Bとして二年かけていたものを、前期に中国語A、後期に中国語Bという形で一年で学習している。教学を考える時には、対象がどのような学習者であるのか、ということをしっかり把握する必要があるだろう。この自明の事実を、実践の生涯学習センターで中国語クラスを受け持たせていただいて以来、改めて実感するようになった。生涯学習センターの受講者は主に主婦、社会人、そして退職された方々だが、本科学生と同じように入門レベルから学習を開始する。しかし、中国語を選んだ動機、実際の学習の進度、理解度、学習の問題など、当然のことながら本科学生とは大きく異なっている。社会人教育、生涯学習としての語学学習についてはまた別の機会に考えていきたいのだが、この社会人クラスをもつことによって、逆に大学の本科学生の特徴が見えてきたよう

に思われ、私には大きな収穫になった。現在受け持っている本科学生は、英文科の学生が、入学時の学科選択から考えても語学そのものに関心がある学生が多いということはいえるが、どの学部学科の学生であれ、ほとんどの学生にとって中国語は初めて学ぶ言葉であり、また高校までの学習経験を考えるなら大部分の学生にとって、英語に続く二番目の外国語になる。もちろんこれは中国語に限ったことではなく、フランス語、ドイツ語など他の第二外国語についても同じことが言える。私はこの「白紙の状態を始められる」という点に大きな期待を感じる。中国語を選んだ理由を聞くと、「他の外国語は難しそうだったから」「今まで習った外国語と違うものをやってみたかったから」「中国語は文法がやさしいと聞いたので」など消極的な理由も少なくないが、それでも、それまで語学に対して持っていた苦手意識を引きずることなく、全員同じスタートラインに立って始められるという期待感をもっているようである。また「近くて遠い国」と長い間言われ、今に至ってもまだまだ未知の部分が多いということが皮肉にも幸いし、中国そして中国語に対して欧米に対するのにも劣らない、ある意味ではそれ以上のエキゾチシズムを感じる、このことも学習者を増やす一因になっているようだ。いずれにしても、この好奇心と期待感を、学習者のモチベーションを高めるのに生かしていきたいものである。

また現在のところまだきわめて少数だが、将来は高校で中国語を学んだことのある学生についても考えていかななくてはならないだろう。高校での科目選択制、そして中国語の需要が将来増加することが見込まれることなどから、外国語として中国語を選択できる高校は増える傾向にあり、当然大学においても中国語既習者が中国語を履修するというケースが増えていくであろう。現在でも、東京で八十校、関東甲信越で二百校以上において中国語を外国語として選択できる。そのような学生は、高校卒業時にはすでに発音、基礎文法を一応学び終わっている。高校での既習者が中国語を履修した例は、実践においてはまだ数例しかないが、他校の教師の話、私自身の他校での経験などからみると、それらの学生が順調に力を伸ばしていった例はそう多いとは言えない。おそらく既習者の学生にとっては発音からまた始めるのは退屈で、しかも「もう知っている」という慢心もあるのだろう。また高校で受けてきた授業の質にもばらつきがあるようだ。既習者に対しては「わかっている」という意識がマイナスに働くのではなく、自分の持っている知識を基礎にしてさらに大きな興味を持てるようにしていく指導が必要だろう。

## 学習を始める前に

前にも述べたように、中国語を選んだ理由を学生に聞いてみると、「ほかの外国語は難しそうだったから」「なんとなく親しみがもてそうだから」「漢字を使っているので

分かりやすそうに思えた」「文法が楽だと聞いたので」など漠然とした答えが多い。この数年増えてきたのは「将来とても役に立つと思うから」「就職の時にいいと思って」「絶対やっておくといい、と親に言われたから」というような実利的な理由である。しかしいずれにしても自分の考えというよりは、周りからの意見や情報の影響を受けているのを感じる。私が中国語を学び始めた七十年代には、中国で起こっていることや中国をめぐる歴史に興味がある、中国の古典をぜひ原文で読んでみたい、等、歴史、文化など様々な面での日本と中国の深いつながりを意識した動機が多かった。今でも生涯学習センターの受講者、特に年配の方の中にはそのような動機を挙げる人が多い。しかし今の大学生の学習者にはそういう意識は薄く、漢字離れも手伝って、中国語をフランス語、ドイツ語、イタリア語などと同じように純粹に「知らない言葉」としてイメージしているようで、それは「チャイ語 (チャイナ>チャイ)」という言い方にも表れている。あまり身構えず、軽いフットワークで語学の勉強を始めることは決して悪いことではない。しかし、言葉は言葉として孤立しているのではなく、そのうしろにはその言葉を使ってきた人々の歴史、文化、風俗、思想などが存在していることはぜひ認識してもらいたい。中国をめぐる情報は日増しに豊富になってきてはいるが、ひたすら新しいもの、珍しいものが採り上げられる傾向があり、マスコミなどの一面的な過熱報道もあり、中国に対する理解は必ずしも正確なものとはいえず、語学学習にもなんらかの影響を及ぼしている。学生と話していても、彼らは中国に関しても実にいろいろなことを知っていて、しかもその情報はほとんど時差がない。しかし一面まったく基本的な知識が欠落していることに驚かされる。奥行きのある言葉を習得してもらうには、その後ろに広がる世界を知ってもらわなければならないだろう。そのようなことから考えても、実際の学習を始める前に、「導入」のプログラムがぜひ必要だと思われる。その場合、教師が中国の歴史、地理、文化などの概説を話したり、中国語についてその歴史、特質、現状などを紹介することも必要だが、できれば学生自身に何かをやらせ、自分の力であるイメージを創りだすようにすることが望ましいだろう。私は今までに次のようなことを行ってみた。

- a. 中国地図を配り、主要都市、山脈、河川、各省などの位置を確認する。また日本との大きさの比較、日本からの距離、位置関係等を知る。
- b. 白地図を配り、省名、都市名、河川、山脈などの名前を書き込んでもらう。
- c. いくつかの方言のテープを聞き、標準語との違いを知る。
- d. よく知っているフレーズ“再見”“謝謝”などの正確な発音を聞き、自分で言うってもらう。
- e. 自分の名前を中国語でいうとどうなるのか聞いてもらう。

a は中国についての基礎知識を少しでも身につけてほしい、という希望があるのだが、特に中国の規模の大きさ、多様性、さらにはdなどとともに、これから学習する

中国の共通語，“普通話”の必要性を認識してもらいたい，というねらいがある。e, f は中国語を音として聞き，実際に発音することによって，自分が今まで発声したことのない発音があることを知り，それをこれから勉強していくのだ，ということをしっかり認識してもらうためである。

全体の授業時間から考えても，この導入にそう多くの時間を使うことはできないが，出来るだけ多くのそして有効な材料を提示し，これから学習を始める学生一人一人が出来るだけ中国と中国語についてのイメージを自分の力で作りあげていく，その助けにしてもらいたい。それによって実際の学習をスムーズに開始させ，学生の学習に対するモチベーションを高めていくことを期待している。

### 「発音の難しさ」について

「中国語は文法はやさしいが，発音が難しい」ということが，あたかも定説のように言われている。「やさしい」「難しい」ということはそう簡単に言えることではないが，多くの学習者が「難しい」と感じている以上，教える側としては，その「難しさ」がどこにあるのかを見極め，出来るだけその「難しさ」を克服できるような教学法をさがしていくべきだろう。中国語の発音を学ぶとなると，声調，有気音／無気音の区別，日本語にない母音や子音など，覚えなくてはならないことがたくさんある。これは中国語に限ったことではない。もちろん外国語によって日本人にとってその発音が難しいと感じられるものもあれば，比較的簡単にマスター出来るものもあるが，それは程度の問題であって，基本的にはどの外国語の発音の学習も同じ問題をもっている。

中国語の学習も他の外国語と同じように，まず発音から入り，時間でいうと九十分授業週二日で，約一ヶ月を主に発音の解説と練習に当てている。まず現在中国で発音表記として使われている中国式アルファベット表記，“拼音（ピンイン）”を覚えなくてはならない。現在，教科書の本文，単語リストの発音表記，辞書の索引など，どれもこのピンインが付けられているため，これがマスターできないと正確な発音も学びにくくなる。アルファベットといっても，あくまでも中国語の発音表記のために借りて使っているものなので，英語の発音とは若干違うものがあることに注意しなくてはならないだろう。ピンインを学ぶ時大切なのは，表記とそれが表す実際の音が正しく結びつき，ピンインを見たらすぐその音を正確に発音するような反応を身につけることだが，それには繰り返し声に出して練習する必要がある。ただ今の学生はアルファベットに対する抵抗感も無く，また豊富な情報によって，母国語でない様々な外国語を耳にする機会も多いため，年配の学習者がどうしてもアルファベットに慣れることが出来ず結局片仮名で読み方をふってしまう，というようなことは，比較的少ない。

実際の発音の学習は、母音、子音、声調が中心になるが、声調については、学習開始後の早い時期に触れておく必要があるだろう。それは、中国語を発音する場合、日本語を発音する時より広い音域を使うということを知ってもらわなくてはならないからだ。母音、子音の発音練習は声調の第一声（日常我々が日本語を話す時の声の高さより、無理しない程度にやや高い音を維持して発音する）で行い、第一声の高さに慣れてもらう。母音（中国語では“韻母”）の基本となる単母音は六つあり、口のまわりの力を抜いて口をややあけたまま「ウ」と「オ」の間のような音を出す“e”，唇の左右への引っばりをのこしながら唇をすぼめることもして「ユ」と発音する“ü”が日本人にとってはまったく新しいものと感じる母音だ。しかし実際には日本語にもあると思いがちな“a / o / i / u”もそれぞれ日本語の「ア」「オ」「イ」「ウ」とは違っており、簡単に言えばどれも日本語より口の動きが大きい。まったく初めて発音する“e”“ü”の発音をマスターするのはもちろんやさしいことではない。しかしある程度の学習歴のある学習者の発音を聞いてみると、難しいと思われる“e”“ü”よりもむしろ日本語と似て非なる母音“a / o / i / u”の方が不正確に発音されていることが多い。そのため中国語らしくない、日本語風な発音になっている。これら単母音のほかに、“-n”“-ng”で終わる母音、二つあるいは三つの単母音がまとまって一つの母音として発音される複母音などにも、注意を払い正確に発音出来るようにならなければならないだろう。しかし発音の基本は、やはり正確な単母音の発音であるように思われる。

中国語には“声母”と呼ばれる二十一の語頭子音があるが、声母は発音し始める時の口の状態と説明すると分かりやすいようだ。北京語をもとにした中国の共通語“普通話”を学ぶ以上、舌をそりあげたまま発音する「そり舌音」も発音できるようにしなければならないが、より注意すべきことは「有気音」と「無気音」の区別だろう。b-p d-t g-k j-q zh-ch z-c, この六組の子音は発音の仕方は同じだが、強い息が出るか出ないかの違いがある。たとえば母音“o”があとについた二つの音節“bo”と“po”を比べてみると“bo”のほうは「ポ」と発音した時に出る息は微かなのに対し“po”はまず「プッ」と息を破裂するように出し、そのあとに母音“o”を付け加える要領で発音する。日本語で「ポ」という時には息を出して「ポ」と言おうが息を出さないで「ポ」と言おうが意味にはなんの違いも無いため、なかなかその違いの重要性が理解出来ないようだ。練習の時には、口の前に薄い紙をぶら下げるように持ち、その紙が出した息で動くかどうかチェックするということがよく行われる。有気音を単独で発音するのは比較的やさしいが、単語あるいは一続きの文を読む時、有気音の字があったら瞬時に息が出るようにするためには、やはりかなりの練習が必要になる。しかし、なによりも大切なことは、息が出るか出ないかでまったくことばの意味が違ってしまふ、という事実をしっかり認識してもらうことだろう。短期留学や旅

行で中国へ行き、中国語を使ってみたけれどもなかなか通じなかった、しかもそれが微妙な発音の違いからだった。こういう経験をして初めて中国語における発音の重要性、正確な発音の必要性を知ることになる。教室で音読をしてもらった時、例えば息を出して読むべき有気音の字（ことば）を息を出さずに読んでしまったり、またその逆に、息を出さない無気音の字（ことば）を息を出す有気音で読んでしまった時、読み違えた、と慌てて言い直す、そうなれば、その学生は有気音と無気音によることばの違いを認識していると言えるだろう。

中国語の大きな特徴の一つとして、声調がある。声調は音節間の音の高低の差である日本語のような高低アクセントとも、英語のような強弱アクセントとも違い、一つの音節内での音の動きの違いである。北京語をもとにした共通語には四つ声調があるため、「四声」とも呼ばれる。この四つという声調の数は、中国の他の方言と比べてみるとかなり少なく、第一声（高く平ら）、第二声（低い所から高い所へ音を直線的に上げる）、第三声（底をさらうように低く）、第四声（高い所から一気に音を下げる）という違いは比較的理解しやすい。しかしこの四つの声調の違いを明確にするためには、まずある程度の声の高さの幅がなくてはならない。第一声は、先に述べたように我々がふだん日本語を話している声の高さよりやや高く、第三声は逆にやや低くしなければならない。発音の音域を広げ、今まであまり出すことが無かった高い音、あるいは低い音を出すことはやさしいことではなく、注意を怠るとすぐに日常日本語を話している時の音域になってしまう。音域を広げる、ということは発音練習中、学生には常に意識してもらわなければならない。それゆえ、母音の発音練習の段階で、やや高い音をある程度持続させて発する第一声で練習することが望ましい。また人間の声の高さには個人差があるため、そんな高い声は出せない、と訴える学生も少なくない。その場合、声調というのは絶対的なものではなく、それぞれ個々の平常時の声の高さを基準として音域を広げるようにすればいいのだ、ということを説明する必要があるだろう。また、第一声をあまり高くない所にしてしまうと、音の高低の幅ができず、あとの声調が出しにくくなってしまうことも注意しておくべきだろう。各声調の練習が一通りおわったら、中国語の単語の中で最も多い二音節語を使って、「～声と～声の組み合わせはこうなる」という声調パターンを頭に入れてもらう。そしてさらに、音節数のやや多い語をつかい、声調、母音、子音に注意しつつ正しく発音出来るようになるまで練習していけば、最後にはある程度の長さを持つセンテンスも正確に発音出来るようになるだろう。

中国語の発音について全般的に眺めてみると、最も気をつけるべき点はやはり対比だ、と思われる。つまり中国人にとっては、息を出す「ポ」“po”と息を出さない「ボ」“bo”は全く異なる音、そして異なることばとして認識されているのである。同様に、舌で息を止めるようにして発音する“an”と、口を開けたままの“ang”、

高い音を維持して発音する“dā”と一気に音を下げて発音する“da”も異なる音，異なる語なのである。こうした，我々が日常あまり意識していない音の違いが，中国語ではただちに語の意味の違いになる，ということを考えると，中国語学習において正確な発音の習得がいかに大事かわかる。正確な発音を学習者に定着させるには、「発音を学習する時期」というのを限定せず，すべての学習時間を通して，常に学生の発音に気を配り，間違った発音を繰り返し指摘し直していくことが必要だろう。多人数のクラスでは，全員の発音をチェックし正しく発音出来るまで直していく時間はなかなか取れないのが現状であるが，だいたい合っている発音でよしとせず，正確に発音しないと理解されない，あるいは他の語になってしまうということは，しっかり分かってもらわなければならないだろう。

発音の欠点は個人個人で異なる。それを見つけて重点的に練習し直していくために，特に多人数のクラスでは，音節表を使って発音矯正を行うことも効果的な方法だ。音節表を音読して録音してもらおう。それを見ていくと，その学生の弱点がはっきり見えてくる。明らかになった弱点を集中的に直すよう指導していく。こうすれば「発音が難しくてもどうにもならない」という漠然とした苦手意識を「ここが苦手だ」という具体的な問題意識に変えることが出来，前向きな学習態度を持ってもらえるようになるだろう。

## 「文法」の学び方について

一年間学習した学生に感想を聞いてみると，やはり「発音が難しかった」という答えが多く，「文法が難しかった」という答えは意外に少ない。にもかかわらず，文法的な内容が理解出来ず，挫折したり思うような学習成果が得られなかった場合が多い。日本語文法も，我々は高校までの間に若干は学習しているが，日本人は母国語の文法を習得しなくても何とか日本語を使うことが出来る。それゆえ「学ぶもの」として「文法」が意識されるのは，ほとんどの人にとって初めて学ぶ外国語，英語においてなのではないだろうか。英語，そしてフランス語，ドイツ語などを学ぶとなると，格，時制などによる語形変化を覚えなければならず，そこで挫折する場合も多い。中国語で“他来”というと，それが過去の「彼は来ました」にも，現在の「彼は来ます」にも，未来の「彼は来るでしょう」にもなる，と説明すると，「面倒な動詞の活用など覚えなくていいのだ」と嬉しそうな顔をする学生も多い。また中国語Aの範囲では文法はそう難しいものではなく，その後半になっていわゆる中国語らしい文法事項が出てくる。その辺が，文法はそう難しくない，という印象につながっていくのだろう。覚えなくてはならないルールが多くないとしても，それは例えば英語的な文法のルールが多くないということに過ぎず，中国語特有の文の組み立てに関するルールはあるの



だ。学生には中国語の文法、語あるいは文の組み立て方のルールが、たとえば英語と比べてみてもだいぶ異なっている、ということにまず気づいてほしい。簡単な動詞述語文、形容詞述語文、それらの否定形、疑問形などは、語形変化も無いことなどから、すぐ文が作れるので、発音練習の段階から少しずつ学習内容に入れていくといい。それによって発音練習が単調にならないだけでなく、中国語の文法にも触れることが出来、また、短いフレーズで会話が出来るということを感じとってもらえることができるだろう。

基礎中国語として学習する文法内容は、ほとんどの教科書において、動詞述語文／形容詞述語文／所有の表現／存在の表現／数、数を使った表現／助動詞／前置詞と前置詞構造／完了の表現／経験の表現／経験の表現／動作の進行、持続の表現／比較の表現／受け身、使役の表現／程度、様態補語／結果補語／方向補語／可能補語などであり、それらの文法事項とともに、様々な副詞、接続詞、助詞、常用フレーズなどが説明されている。教学上、どの順序で教えていくか、ということも問題になるだろう。もちろん使う教科書の学習順をむやみに変えることは適当ではないが、学生の理解を容易にするためには、時にはそれも必要ではないだろうか。たとえば、形容詞述語文と動詞述語文を考えた場合、派生する問題がより多い動詞述語文よりも形容詞述語文を先にしたほうが学習がスムーズに進むように思われる。また関連のあるものはまとめて学習した方が印象に残りやすい。たとえば「この時に」とポイントする時間「時点」と、動作の行われる時間の量「時量」などはことばとして学ぶだけではなく、それらの文中に置かれる位置と一緒に頭に入れておく。このようにある程度学習順を変えたり、予習という形で先に触れておくことも、学習を効果的に行うための一工夫だろう。そして、大きい問題だが、理想的な教科書はどういうものか、ということにもつながってくると思われる。

文法の学習では、使われる文法用語も問題になるだろう。中国語専攻の学生についてはやはり文法用語の定義、日中の違いなどにも触れる必要があるだろうが、第二外国語として中国語を学ぶ学生に関しては、なるべく用語は分かりやすいものを使い、余分な負担や混乱を防ぐようにするべきではないだろうか。たとえば、「目的語」にあたる中国語は“賓語”で“賓”が「客」の意味であることから「客語」としたテキストもあったが、これは「目的語」のほうが分かりやすい。また、“可以”“要”“能”など主に能力や願望などを表し動詞の前に置くことのできる品詞は、中国語をそのまま使い「能願動詞」としている教科書もあるが、その働きからみると、完全に一致はしないが、英語の助動詞とほぼ同じ働きをするので「助動詞」というほうが分かりやすいのではないだろうか。また「主語」は中国語でも“主語”だが、その内容は「動作をおこなうもの」に限らず、むしろ「話題」という性質をもっている。このことと関連して、中国語では話題となることばは文の前に出される、ということも説明出来

るだろう。

初級から中級での練習方法として、“替換練習”（置き換え練習）がある。これについては、機械的な繰り返しになるとして否定的な意見も多いが、今までの私の経験では、かなり有効な練習方法だと思われる。たしかに機械的な繰り返しなら学ぶ側には何も残らず無味乾燥なものになってしまうだろうが、まず基本文型をしっかりと頭にいれ、見ないで言えるようにし、そのあと一部の語彙を他のものに入れ替えていく。つぎに、それが実際のこと、自分自身のことを答える答えになるような質問をしていく。こうして問いと答えの形で練習をしていくのは時間はかかるが、習った文型を使って自分のことばである内容を言い表せた、という実感が得られる。また、同時に一人一人の発音もチェックしていくことが出来る。

文法に関して、基礎中国語の範囲としてはどこまで学習するのが適当か、ということも問題になるだろう。動詞、形容詞の後について、その動作や状態についてさらに詳しい描写を付け加えるのが補語である。動作の結果を述べる結果補語、動作や状態の程度、様子を述べる程度補語、動作の方向を述べる方向補語、さらに可能／不可能を表す可能補語があるが、どのテキストでもその後半あるいは最後近くにこの補語が出てくる。文法のレベルについて、何をもって初級、中級という区分けをするのかは難しい問題だろうが、この補語が出てくる前後が一応そのさかいと言えるのではないだろうか。それ以前が最も基本的な表現であるのにたいして、それ以後はより詳しい表現になるからだ。問題なのは基本的な文法事項がしっかり理解出来ていないうちに、その上に積み重なるようなより複雑な事柄を学ばなければならないことだ。最も基本的な事柄と、より複雑な事柄を同じ要領で、同じような時間をかけて学習していくのは問題ではないだろうか。私は補語については、なるべく単純な例文を示し最も基本的なルールを説明するにとどめ、その実際的な使われ方については、講読を中心にした後期に持ち込み、文章を読みながらそれらが文の中でどんな働きをしているか、理解を深めていってもらうようにしている。中国語文法の教学法には、文法のルールを一つ一つ頭にいれ、それが応用出来るようになるまで練習を繰り返す段階と、字（語）の使い方を理解し、その使われ方に習熟していく段階があり、後者にはより中国語特有の教え方、学び方があるのではないだろうか。この二つの段階はまったく別個のものではないし、つながっているのだが、それぞれに適した教学法を今後も考えていかなくてはならないだろう。

### どんなテキストを使うのか

どんなテキストを使うか、これは一年の教学を始めるにあたっての大きな問題の一つだ。テキストの長所、短所というのもあまり短期間では分からないため、使い始め

てよほど使いづらい、あるいは問題の多さに気づいた場合を除いて、一種類のテキストを二、三年は使用してみてその有効な使い方を考えるようにしてきた。

中国で作られた外国人留学生用テキストを使ったこともある。中国では建国後間もない1950年代末から外国人留学生向け中国語学習のガイドラインが研究されており、1970年代から1990年代にかけて主に北京語言学院（現在の北京語言文化大学）から『基礎漢語』（1972）、『漢語課本』（1977）、『基礎漢語課本』（1980）、『實用漢語課本』（1981）、『初級漢語課本』（1986）などのシリーズものの外国人向け総合教科書というべきものが出版され、英語版のほかに日本語版、フランス語版などもつくられた。まだ中国語の教科書も少なかった時代、これらは外国人中国語学習者に定本のように使われた。本文の内容にはそれぞれの時代が反映されていたものの、会話形式の本文、単語表、語と表現についての解釈、文法事項についての解釈、練習問題、という組み立ては基本的に一貫して変化していない。現在中国では外国人留学生を受け入れる大学も増え、北京語言文化大学のほかにも、北京大学、上海復旦大学など多くの大学で独自の総合教材をつくっており、総合教材のほかにも、口語教科書、聴力教材、講読用教科書、なども充実してきている。かつて『初級漢語課本』（1986）の英語版を英文科学生対象クラスで使ったことがあるが、それを選んだ理由は、一つにはその言葉を使う国で作られた教科書を使うことによって、その言葉を直に感じ取ってもらいたかったのと、もう一つは英語版を使うことで、英語と中国語の違いを日本を通さずに発見してもらい、専攻である英語に対しても興味や理解を深めてほしかったためだ。しかし実際には、中国にいる外国人留学生の生活を想定した内容なので日本で学習している学生にとっては理解しにくい内容も少なくない、まったく漢字を知らない学生を対象としているため漢字学習などの部分が多すぎる、知らないことを英語で勉強するのは負担が大きすぎる、などの理由で結局思うような成果が得られなかった。しかし中国で出版される教科書の多様化、改良が進んでいる現状をみると、中国で出された英語版教科書を使うやり方も今後また試みてみたいと考えている。現在日本のほとんどの大学の第二外国語としての中国語では、日本人研究者によって書かれたテキストを使っており、その数も年々増えている。内容も様々な工夫が凝らされているが、本文は会話形式のものがほとんどであり、文法については説明の詳しさに差はあるものの、やはり教室での教師に負う部分が多い。各課に出てきた文法事項をもり込み、会話形式の本文とも関連のある内容の短い文章をのせてあるものもある。本文を会話文にすることについてだが、まだあまり複雑な構文、表現を習っていない段階では本文は会話形式にならざるを得ないとも考えられるが、会話文だけだと、読解力がつきにくいように思われる。その場合、会話文を文の組み立て、文法的理解につなげる教学法が必要になってくるだろう。またそれぞれの文法事項をしっかり習得し活用出来るようにするためには、ほとんどのテキストにおいて練習問題が圧倒的に足りない。その解決

法としては、本文を使った置き換え練習，会話文を非会話文に直す練習，会話文の話題を使った簡単な作文などが考えられる。ごく簡単な読み物を補助教材として使うことも考えられるが，学生への負担，煩雑さなどを避けるためには，やはりできるだけテキストを中心に，それを十分活用するやり方がふさわしいと思われる。

以上挙げてきたことは，すべて授業を進めながら常に考え，感じてきたことだが，それらはさらに検討すべき問題ばかりである。私はこれらを教師としての自分に向けられた課題とし，一つ一つ掘り下げ，よりよい教学を目指していきたい，と考えている。